

週刊 武四郎

第 32 号

2018年(平成30年)11月14日(水)
発行・松阪市

●毎月第二週は、
松浦武四郎と北海道に
ついてご紹介します

監修・松浦武四郎記念館

かわいいそうつなニシキパ。

松浦武四郎さんの著作の中には、アイヌの人々の生活を生き生きと記録した『近世蝦夷人物誌』というルポルタージュもあります。その中に登場する武四郎さんの姿は、とても人間味に溢れています。

たとえば……天塩川の上流オクルマトナイ(オクルマナイ)で泊めてもらったエカシテカニは、視力を失い働けなくなつて、屋根の破れめには露の葉がかぶせてあるような家に住む貧しいアイヌでした。でも、妻のテケモンケは(彼女も事故で左目を大怪我してしまっているにもかかわらず)めげることなく、男に負けぬほど薪を取ったり、魚を捕ったりして家族を養っていたのです。この一家の話は、『天塩日誌』にも出てきます。こちらでは、武四郎さんが家に入っ

たとたんにお金が足らなくなり、麻を振りかけたように飛びついてくるので困っていると、家に居合わせた非常に可愛らしい子供たちが柳の大きな皮をはいできて敷いてくれたという記述もあります。

エカシテカニ一家は貧しいけれど、十人の子宝に恵まれています。でも目下の悩みは、子供たちが大きくなると、みんな交易所に連れて行かれ、働かされて帰ってこないことでした。わずか十二歳の子までもが親元から離され、番屋で働かされていたのです。武四郎さんは気の毒に思いながらも我が身を振り返り、「大勢の子供に囲まれて結構だ。わしなど四十



▲「絨製足袋」シナノキの内皮で作った織りで編んだ靴下。アイヌの女性が武四郎のために特別に足袋の形に編んでくれたもの(松浦武四郎記念館蔵)

になるというのに、いまだ子供どころか妻もおらん」というと……エカシテカニ夫妻は黙りこくってしまいました。「ニシキパは、どこにお住まいなのでしょうか」しばらくして妻のテケモンケは尋ねました。

「江戸と違って、蝦夷地からは三日口へらいかかやうに遠いから」武四郎が答える。「もっ少し近ければ、うちの子をひとり差し上げて、と思っただんですけれど……ちょっと遠すぎますねえ」とテケモンケは、心底申し訳なさをうに言うのでした。

そのひと言に、武四郎さんは「心を錐で刺されるような思いがしたと記しています。貧しい一家と彼らを哀れんでいた武四郎さんの方こそ、逆に哀れまれる存在であったということなのでしょう。」

松浦武四郎 (1818～1888)
三重県松阪市出身。幕末から明治にかけての探検家、著述家、蒐集家。蝦夷地(今の北海道)を6度にわたり探査し、アイヌの人々と交流を深め、蝦夷地の詳細な記録や地図を作成した。維新後、蝦夷地に代わる新たな名称として(北海道)のもととなる(北加伊道)を含む6案を政府に提案したことから(北海道の名付け親)と称される。



●松浦武四郎を主人公とした小説『がいなもん 松浦武四郎一代』(河治和香著)が、小学館より好評発売中!

文・河治和香 装画・りんたろう 編集・細山田正人 デザイン・DOMDOM

